ベストクラス選定理由書

作成者：中村伊吹・吉村勇人・中山楓・坂本愛梨・篠原利治・左海里帆・柳真人・伊藤博之

科目名称　　異文化理解Ⅰ （担当教員名：山本大貴）	
課　　程　：　学部	開講時期　：　後期
授業形態　：　講義・演習	授業規模　：　３１～８０人
インタビュー対象教員名　　山本大貴 （実施日時：8月21日；　実施場所：ZOOM上）	
インタビュー対象受講者名　　劉雲雲・江尻脩人・時本希望・冨重嵩登 （実施日時：8月21日；　実施場所：ZOOM上）	

選定理由

私たちは今回、ベストクラスに異文化理解Ⅰを推薦する。理由は三つある。

一つ目は受講生が能動的に取り組みやすい授業づくりである。受講生が能動的な活動をするために以下のような工夫が施されていた。異文化理解という日常生活に関連しやすい内容のため、受講生の経験と結びつくような例や話題を提示していた点、文化相対主義を前提としたグループワークを多用して、受講生の活動機会を多く作った点、先生が自ら受講生とコミュニケーションを取り、受講生にとって親しみ深い存在として振る舞っていた点など、授業内外での受講生との関わり方や受講生の活動機会、そして適切な評価とフォローアップについて工夫されていたことにより、受講生もそれに応えるように積極的に参加できたと考えられる。

二つ目はペアワーク、グループワークのあり方である。この授業ではペアワーク、グループワークを多く取り入れていた。ただ単に行うのではなく、四日間ある集中講義の中、一日ごとにペアやグループを変え、できるだけ関わりを持たない人との交流を行うよう促していた。このことにより、集中講義で四日間に一気に詰め込むがゆえにマンネリ化してしまうという課題を打破し、常に授業に対する新鮮味を残しながら活動することができた。また、異文化理解のコンセプトとして「自分以外の人の文化は全て異文化」というものがある。授業を通して初めての人と関わり、活動することによって、自分がこれまで意識しなかった文化や価値観について認識することになり、授業の内容を深めるという点においてもこの工夫は欠かせない要素として捉えられる。

三つ目は留学生への配慮がしっかりとなされていたということだ。講義は基本日本語で行い、一部の授業を英語で行うという形をとっていた。そのため、日本語で講義を行った後の休憩時間に留学生の方々に先生自らが英語で授業の理解度を聞き、必要に応じて補足するように配慮されていた。また、グループワークの中では、先生がもちろん机間指導を行うが、グループ内でも日本人学生が留学生へ配慮するなど、受講生間での助け合いも見られた授業であった。また、英語で行う授業では、英語が苦手な受講生のため、なるべく平易な言葉や言い換えを多めに使い、スライドを充実させ、理解を助ける工夫がなされていた。このように留学生のみならず、日本人学生にも配慮をなされていた。それに加え、将来、受講生が中学校・高校で英語で授業をしなければならないという状況に直面した際に役にたつモデルとしての役割も果たしている。

以上が今回、私たちが異文化理解Ⅰをベストクラスとして推薦する理由である。授業の内容、他にはない特色のある授業の工夫やルール、先生や受講生の授業に対する取り組み方は評価されるべきであると考える。